

「江戸時代」に学ぶ人材育成

企業経営漫談士 岡野実空

明治の代から大正、昭和を経て、いよいよ平成も残りわずか。否応なしに我が国の歴史を意識せざるをえないいま、さまざまな識者が共通して話題にするのは「江戸時代」のこと。それはいま、近現代の行き詰まりを背景に、「維新」という言葉に覆われてしまった前世のさまざまな物事から、我が国の今後を考えるヒントを探しているからです。ということで今回は、「徳川の代」を「教育」の視点から俯瞰し、次なる「令和」に企業が担うべき「人材育成」のポイントを考えます。

その1: 藩校

江戸時代の学校の上位にあったのは「藩校」。官立の高等学校あるいは大学として江戸中期に各藩(国)で開設され、幕末には280校を超えるまでになりました。そこでは漢学・和学の伝統的学問ばかりでなく、数学・天文・医学などの実学も教授されていました。それは単に藩政を維持するだけでなく、当時多くの藩が陥っていた財政危機を打開し、地域ごとの殖産興業を担う人材の育成が急務であったことを物語っています。

それを現代に置き換えれば、さしずめ今世紀初頭から多くの大企業に開設された「企業内大学」。いまその見直しのポイントとなっている、「リベラルアーツ」や「技術教育」などに関しては、多彩な「藩校」が多くのヒントを与えてくれます。

その2: 郷学

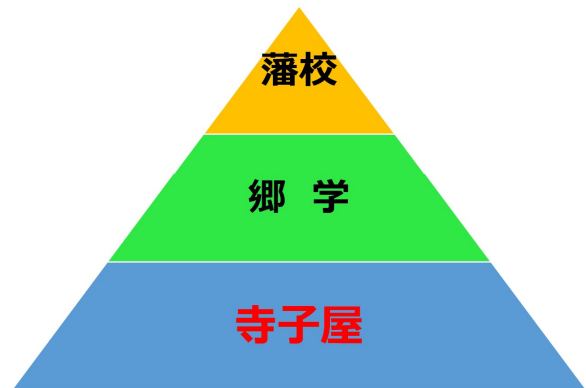
すでに数多く存在していた民間の「寺子屋」に対し、江戸中期以降、主に藩主の支援によって設立されたのが、公立の初等教育機関の「郷学」。それは「読・書・算」の学習を中心に、「藩校」の底上げに大きく貢献しました。また藩士の子弟ばかりでなく庶民向けにも設置され、江戸後期の教育の普及に拍車をかけました。この四民共学に加え、女子も数多く受講していたことが、明治の迅速な初等教育体制の整備につながったのです。

いま我が国の初等教育は過渡期。自国や地域のビジョンもなく、他国が実施しているからという理由で、画一的な英語やプログラミング教育が新たに加わり、現場の混乱と困惑を招いています。その姿は、さながら「富国強兵」を掲げてカリキュラム統一を行った150年前の再現。社会が「多様性」を強く求めているいま、初等から高等教育まで「学習指導要領」で画一化しようとする方向性は、時代錯誤としかいえません。

その3: 寺子屋

江戸時代の教育の底辺を支えたのは、2万の「寺子屋」。それは浪人、僧侶、医者などのボランティアによる民間の教育機関

KM0-28 江戸時代の教育体系



で、親の意向や子供の適性を踏まえた選択が可能であり、町人が多様な職業に就くことを可能にしました。またその分業によるネットワークが、江戸中期以降の経済的発展の要因となったことを見逃すわけにはいきません。

さて学校教育の画一化と質的低下が顕在化しているいま、その卒業生を受け入れる側の企業には相当な努力が求められます。具体的には、まず初等～中等教育の不備を補い、職業人に必須な基本動作が確実にいえるようにすること。次には、個々に残る「個性」を見極め、有益な「差」を生み出せる「多彩な人材」へと育成することです。

これらは企業の教育担当の範囲をはるかに越え、まさしくマネージャーの仕事ですが、同時に職場のメンバーの協力が欠かせないことは明らかです。その「共育」を考えると、江戸時代の社会には数多のヒントが眠っているのです。

前世紀末から続く、JR 東海「そうだ 京都、行こう。」キャンペーン。その中でも出色の一つは、「これからのニッポンは？」の悩みには、「むかしむかしのニッポン」がお答えします。(1993年冬、伏見稲荷大社) ということで、「そうだ 江戸東京博物館、行こう。」

2019年4月8日 実空